学　会　記　事

第256回新潟外科集談会

日　時　2003年5月10日（土）
午後1時30分～午後4時43分
会　場　新潟大学医学部　有壬記念館

一　般　演　題

1　腐食性食道炎・食道閉塞に対し食道切除及び胃管による再建術を施行した一例

池田　義之・中川　悟・丸山　聡
田辺　匡・坂田　英子・若林　貴志
大橋　学・神田　達夫・畠山　勝義
新潟大学大学院消化器・一般外科

症例は33歳，男性．自殺目的に塩化水素系薬物を服用．その後腐食性食道炎による食道閉塞となり，内視鏡的拡張術も無効で，胃瘻を造設された．閉塞部位の手術目的に当科受診．門歯列より20cmから内腔が完全閉塞していた．CTでは，胸部上部及び下部食道に内腔の虚脱を認めた．胃瘻造影では，胃に病変は認めなかった．手術所見では，閉塞部位は胸部食道内に限局しており，胸部食道切除及び胃管による再建術を施行した．切除標本では，胸部上部食道に8.0cm，下部食道に3.6cmの閉塞があり，固有筋層同士が癒着し，線維化による壁肥厚を認めた．術後経過は良好で，経口摂取も順調で，誤嚥や逆流症状はなく，第15病日退院した．

2　GISTとCD34陽性，c-kit陰性Isp polypを伴ったEB virus関連早期胃癌の1例

伊藤　寛晃・牧野　春彦・大橋　優智
新潟県立坂町病院外科

GISTとCD34陽性Isp polypを伴ったEB virus関連早期胃癌を経験した．

症例は69歳男性，慢性C型肝炎通院中GTF施行．①胃上部大彎側I型病変，②胃前庭部小彎側Isp polypを認めた．生検病理結果は① por2，② chronic gastritisであった．胃全摘術D1＋αを施行，① gastric cancer［U］Gre, 25×22mm, sType1, sT2（MP）H0P0M0N1Cyx, sStage Ⅱ，②[L] Less, Ispであった．病理検査結果は① adenocarcinoma（por2≫tub2), sm2, ly0, v1, INF α, int, EBER（＋), EBV PCR（＋），② Isp, inflammatory fibroid polyp, CD34（＋), c-kit（－），n0だが，No.3リンパ節として提出した検体の1つがGISTであった（CD34（＋), c-kit（＋)).

3　5-FU/TXL化学療法が奏効した進行再発胃癌症例

設楽　兼司・林　美貴子・大川　卓也
大野　玲・井石　秀明・福成　博幸
新潟県立十日町病院外科

我々は5-FU/TXL化学療法を行い良好な成績を得たので報告する．

【症例・方法・結果】3例の経口摂取不能進行胃癌症例に対して，5-FU 333mg/m^{2}を24時間day 1～5/week，TXL 60mg/m^{2}を1時間day 1/weekで投与した．3例ともに化療後PRが得られ内2例は経口摂取可能となり，IVHからの離脱が可能となった．IVH離脱群は外来にてTS1/TXL療法を行った．

【結語】経口摂取困難な高度進行胃癌症例に対する5-FU/TXL療法は重毒な副作用も認めず有効な化学療法になると考えられた．

4　当科での食道癌，胃癌に対する鏡視下手術（VATS-E，LADG）の現況

桑原　史郎・山崎　俊幸・大谷　哲也
片柳　憲雄・山本　睦生・斎藤　英樹
新潟市民病院外科

当科では2002年4月より腹腔鏡補助幽門側胃切除（LADG）を，10月より胸腔鏡下食道切除